

令和2年2月27日

令和元年度 特別の教育課程の実施状況等について

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

これからの時代において必要とされるグローバルな視野を持った人材を早期から育成するため、小学校第1学年及び第2学年の生活科20時間を外国語活動に替えて実施する。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

本市は常陸国一の宮鹿島神宮の門前町として栄え、発展してきた。また、2002年にはFIFAワールドカップの会場地となり、2020年には東京オリンピックサッカー競技の開催が予定されている。歴史的伝統とスポーツによる活力あるまちであり、「子どもが元気 香る歴史とスポーツで紡ぐまち 鹿嶋」を本市総合計画における将来像に掲げている。世界の人々とのコミュニケーションをとおして、本市の魅力を世界に発信していくことができるグローバルな人材育成をより一層推進することが、本市の発展と教育活動の充実に必要であると考え、教育課程の特別措置申請を行うこととした。

(3) 特例の適用開始日

2007年4月

2018年4月 変更

(4) 取組の期間

2030年4月まで

2. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ⊙計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ⊙実施している
- ・実施していない

② 第1学年からの外国語活動の実施は、英語に慣れ親しむことにつながっていると思いますか。

思う	60.0%	どちらかというと思う	30.0%
どちらかというと思わない	10.0%	思わない	0%

③ 第1学年からの外国語活動の実施によって、外国の文化（生活、習慣、行事等）に対する興味・関心が高まっていると思いますか。

思う	40.0%	どちらかというと思う	60.0%
どちらかというと思わない	0%	思わない	0%

④ 第1学年及び第2学年からの外国語活動に期待することは何ですか。（自由記述）

- ・発音・聞き取りの育成。
- ・写真や動画で文化の紹介をしたり、外国の歌やゲームを行ったりして、外国の文化に興味をもてるようにしたい。
- ・感覚的にアルファベットを読んだり単語を覚えたりすること。
- ・外国語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうという気持ちを高めること。自分も言ってみたい！できた！間違えてもいいんだ！と思える授業の雰囲気も大切。
- ・英語への慣れと多様な文化への理解。

(6) 保護者及び学校関係者による評価

① 第1学年からの外国語活動の実施は、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながっていると思いますか。

思う	64.3%	どちらかというと思う	28.6%
どちらかというと思わない	7.1%	思わない	0%

② 第1学年からの外国語活動の実施は、英語に慣れ親しむことにつながっていると思いますか。

思う	71.4%	どちらかというと思う	28.6%
どちらかというと思わない	0%	思わない	0%

③ 第1学年からの外国語活動の実施によって、外国の文化（生活、習慣、行事等）に対する興味・関心が高まっていると思いますか。

思う	57.1%	どちらかというと思う	28.6%
どちらかというと思わない	14.3%	思わない	0%

- ④ 第1学年及び第2学年からの外国語活動に期待することは何ですか。(自由記述)
- ・英語が話せるようにとは思わないけどネイティブの発音を聞き取ったり発声できるようになればいい。
 - ・英語への苦手意識を少しでも減らせる期待。
 - ・英語を話すことが当たり前になってほしい。
 - ・自主性の育成と多様な文化の理解。
 - ・楽しみながら身につけていって欲しい。
 - ・文法などの机上の勉強より、英語に苦手意識をもたないうちに、会話やコミュニケーションを楽しんでもらいたい。
 - ・早い時期からの学習により、慣れ親しむことが将来につながっていくと思う。

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校においては、児童が外国語活動の時間を楽しみにしている。保護者や教職員も、外国語に慣れ親しむよい機会だと考えている。外国語活動は、児童の外国への興味関心を高め、英語を話せるようになりたい、ALTと英語で話したり活動したりしたいという意欲の育成の点で成果が上がっている。

一方で、第2学年児童において、ALTと英語で話したり活動したりするのはどちらかということと楽しくない、と感じている児童が25%いるという課題もある。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

本校においては、第1学年から外国語活動を実施してきた第6学年対象外部調査「小学校英検トライアル」において、平均点を大きく上回っている。このことから、第1学年から外国語活動を実施することにより、英語に慣れ親しみ聞いたり読んだりする基礎的な理解と技能が養われていることが明らかとなっている。

一方で、日本語にはない音を聞き取れない・発音できないことから苦手意識を高めている児童もいるという課題もある。また、間違えることへの「恥ずかしさ」や間違えないための「正確さ」から、積極的なコミュニケーションにつながらないことがある。

4. 課題の改善のための取組の方向性

このような課題を踏まえて、「コミュニケーション」という視点で本特例による外国語活動の授業デザインの工夫・改善を図ることが必要と考えられる。その土台として、自分も言ってみたい、行ってみたい、できた、間違えてもいいんだ、と思える学級集団の雰囲気や学校の教育活動全体を通して醸成することに努めたい。